

# PROFILE

## 金子清俊

東京医科大学生理学第二講座教授



この度、東京医科大学生理学第二講座の主任教授を拝命しました金子清俊と申します。神経疾患遺伝子研究、プリオン蛋白質研究等、これまでの経験を活かし、皆さんがあっと驚かれるような視点で、来るべき生理学の時代に貢献できたらと思っています。

### 教育とは、ミニチュア版の自己コピーをつくる事ではない

学部学生の教育に関しては、必ず身につけておくべき必須の知識・技量と言うものがある事は言うまでもありません。また大学院生も同様に、最低限の知識・作法を身につける必要があります。しかし、一流の研究者を意識すればするほど、どうしても忘れられない一言があります。「金子君、教育とはミニチュア版の自分の分身を作ることではないのだよ」、これはある方とワインのボトルを一本空けた際に言われた言葉です。

奇妙なことにご本人は、「そんなことを言った覚えはない」、の一点張りなのです。浅田次郎さんの書かれた、「蒼穹の昴（そうきゅうのすばる）」の一節に、科挙の試験に挑む部屋でのカンニングの話が出てきます。主人公が、白髪老人の答案を書き写し、見事に試験に合格する、というくだりがあるのですが、その白髪を受験者は主人公自らが作り出した幻影だと言うのです。科挙試験の重圧により、このような事例が多々あったとのこと（私の場合は、詳細を忘れただけのことでしょうが）。

それはさておき、基礎的な部分を修行した後は、絶対に杵をはめないがspoon feedingも決してし

ないこと、例えて言えば若い才能の芽を押さえついたり引っ張りすぎたりしないことが肝要と思っています。自己を基準とする限り、（例え自分自身と寸分違わなくとも）既にその時点でミニチュア版以上には成り得ないのですから、多様性を含め、自分の身の丈以上の才能に託さなければ、breakthroughは見込めません。それはミニチュア版の自己コピーでは不可能です。いわんや単なる数合わせのための妥協をや、です。

### 悔いなき人生

先日ある番組で、滋賀県にある月心寺庵主の明道尼さんのお話を拝聴しました。仏教の修行と聞きますと、自己の鍛錬に終始するもの、つらく苦しい難行苦行に一生を費やすものとのイメージがありますが、お話を伺った限りでは、彼の方の精神は、自由奔放、思うがまま、でありました。難行苦行の果てに、必ず素晴らしい成果が待ち受けているわけではないのは、科学も同様です。それでもやらずにいられない、どんな結果が出るのか、世界の誰よりも先に見てみたい、知りたい。実年齢に関らず、いつまでも子供のような探究心、興味を持ち続けている方々と一緒に研究ができればと思っています（名利に使われる方々のご遠慮ください）。

こうした考えをご理解くださる方々に恵まれ、2005年4月から現職に従事する機会を得ることができました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。最後になりますが、本PROFILE欄に執筆することを御高配くださった生理学会関係者の方々に、深謝申し上げます。

略歴

1983年	新潟大学医学部卒業	1999年	ローを経て助教授 国立精神・神経センター神経研 究所疾病研究第七部部长
1991年	新潟大学脳研究所神経内科助手		
1993年	東京医科歯科大学神経内科助手	2005年	東京医科大学生理学第二講座主 任教授
1994年	カリフォルニア大学サンフラン シスコ校神経内科リサーチフェ		